

After

「大学＝教職員と学生とで
つくり続けるもの」

学生は教育を受けるだけでなく
よりよい教育づくりの担い手でもある。



学生の声が改革の起点に!

学修者本位の 大学のつくり方

Before

「大学＝教員、
または教職員のもの」

学生は一方的に教育を提供される立場。



大学をつくるのは、
教員か、職員か、学生か？

「グランドデザイン答申」が出されてから、はや5年。この答申を起点に、「教学マネジメント指針」「大学設置基準等の改正」など、今後の高等教育のあり方を決める大きな施策と、それに伴う法改正が次々と出されている。

グランドデザイン答申は2040年の社会状況を展望して高等教育がめざすべき姿を示したもののだが、そのベースとなるのが、「学修者本位の教育への転換」だ。各大学での進捗はどうだろうか。文科省による全国学生調査結果によると、「大学での学びによって成長を実感したか」という質問に「そう思う」と答えた割合は3割、「学生の意見を通じて大学教育が良くなっているか」に「そう思う」と答えた割合は1割強にとどまる。

そもそも「学修者本位の教育」とは、学修者である学生の成長や、学生自身が大学の構成員としての自覚があつてこそ、成し遂げられるものではないだろうか。

「現在、高等教育機関で学んでいる学修者には、後に続く学修者の学びも含めて高等教育が充実していくために、これから行われる高等教育改革に参画することを期待している」これは、グランドデザイン答申の結びの言葉だ。急速に進む人口減の中で、今後の大学の行く末を担うのは、ほかでもない、「大学教育で成長した実感のある」学生だろう。

今号では、「学修者本位の大学づくり」の重要な担い手として学生を捉え、学生参画型の大学づくりのあり方を考えてみたい。